

鈴木寛 社会の機能 としての スポーツ。

スポーツは、人間の生活に必要な不可欠なものではない。未来永劫、「衣食住」以上の存在にはならないだろう。しかし、世の中に存在した方が良いというのも事実である。スポーツは人間の精神的成長や協調性を育み、感動や興奮や悔恨や絶望や喜び……ありとあらゆる感情を内包する。「人間的ふれあい」が希薄化した現代にあつては、確実に「世の中に必要な機能」と化しているのである。スポーツをこよなく愛する政治家・鈴木寛が、政治という仕事の現場の日常から感じ取った「スポーツの存在意義」を綴る。

第八回 北京オリンピックで 考えさせられたこと。

兵藤育子 一構成
Composition by Ikiko Hyodo

国威発揚型の集大成を経て、
オリンピックが目指す方向とは。

ご招待を受け、北京オリンピックの開会式に出席した。参加したメンバーは現在と歴代の文部科学大臣、スポーツに造詣の深い超党派国会議員一〇名ほど。二泊三日のスケジュールで、一日目は開会式を見学、二日目は中国オリンピック委員会(COCC)の方々と交流会、三日目は選手村の視察というのが主な目的だ。東京オリンピックの招致活動が行われている現在、北京へ足を運び、自分の目でオリンピックを見ることができたのは、非常に有意義な経験であった。一番印象に残っているのは、やはり開会式の壮大さだ。日本のメディアでは賛否両論あつたようだが、

生の雰囲気味わった者としての率直な感想は、なかなか見ごたえのある内容だった。東洋文化、さらには漢字文化の奥深さを世界中に発信できたのは、同じ漢字文化圏の日本にとっても喜ばしいことだろう。各国の首脳が集まり、ジャーナリストの数も圧倒的に多く、最新技術を駆使した「鳥の巣」の舞台装置は大変な迫力であった。その映像を世界中の何十億もの人々が見ているかと思うと、単なるスポーツの祭典という枠には収まらない、オリンピックの計り知れない影響力をあらためて実感した。

二日目には、COCCの役員らと話をする機会があつたが、印象的だったのは、みな開会式を無事に終えて、嬉しさよりも安堵感にあふれた表情だったことだ。我々日本人も一九六四年の東京オリンピックのときは、

まさにこんな感じだったのかもしれない。一九六四年の東京、一九八八年のソウル、そして二〇〇八年の北京。約二〇年おきにアジアで開催されたオリンピックは、まさに各国の成長と連動している。中国は名実共に、ようやく国際社会に仲間入りを果たした。今後、中国社会はさまざまな面で変わっていくであろうし、オリンピックは中国人が脱皮する大きな契機にもなつただろう。オリンピックはスポーツのみならず、文化、政治、社会と密接に結びついているのだ。

しかし、その一方で、東京でオリンピックを開催する場合、北京のスタイルを踏襲する必要はなく、いかにして日本らしさを出していくべきかを考えるきっかけになった。北京オリンピックの開会式は、チャン・イーモウというカリスマ・プロデューサーの手がけた統一感のあるショーであつたと言える。実際、プログラムまで配布され、まるでオペラを観ているかのような錯覚に陥つた。中国の規模、そして世界情勢を考えると、今回は国家が主導するオリンピックの集大成と言えるのではないだろうか。つまり「国威発揚型オリンピック」は、今回の北京でピークを迎えた、ということだ。そう考えると、二〇一二年に行われるロンドンオリンピックは、原点に立ち返つた新たな哲学、思想にもとづく開会式になることが期待される。二〇一六年に東京オリンピックが実現した場合も同様だろう。その場合、時代性に沿つた象徴的な演出になり得るヒントがすでにある。「YOSAKOI」である。

「YOSAKOI」は、発端となつた高知の「よさこい祭り」を、地元文化を取り入れてアレンジした祭りの総称。北海道の「YOSAKOIソーラン祭り」や「原宿表参道元氣祭スパーよさこい」をはじめ、草の根の市民の主導で、しかも、プロ以上の質の高いパフォーマンスを繰り広げるチームもすでにくわつと存